

帰国報告書

枝幸町立枝幸小学校（シカゴ日本人学校） 保野孝之

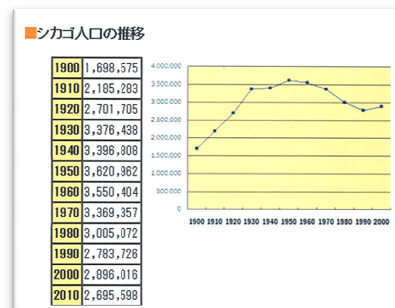
◎シカゴの概要

シカゴは、アメリカの中西部イリノイ州に位置する。五大湖の一つであるミシガン湖に沿ってひらけた美しい街であり、ニューヨーク・ロサンゼルスに次いで、全米第3の都市である。

しかし、最盛期の1950年代と比べると五大湖周辺の重工業産業衰退のため、25%以上も減少している。2013年の近郊を含む都市圏人口は910万人であり、世界第34位、同国では第3位である。

アメリカ第2の経済および金融拠点で、五大湖工業地帯の中心であり、鉄道、航空、また海運の拠点として発展。摩天楼がそびえ立つアメリカ型都市の発祥とも言われ、ダウタウンは近代的なビルが建ち並び、シアーズ・タワー（現在はウィリス・タワーに改称）はかつて世界一の高層建築として知られた。また、マコーミック・プレイスコンプレックスは北米最大のコンベンション・センターであり、オヘア空港は全米有数の過密な空港として知られる。

2014年、アメリカのシンクタンクが公表したビジネス・人材・文化・政治などを対象とした総合的な世界都市ランキングにおいて、ニューヨーク、ロンドン、パリ、東京、香港、ロサンゼルスに次ぐ世界第7位の都市と評価された。ダウ・ジョーンズらの2013年の調査によると、世界第9位の金融センターと評価されており、北米ではニューヨークに次ぐ第2位である。都市の経済規模（GDP）では2008年には東京、ニューヨーク、ロサンゼルスに次いで第4位であったが、2012年には第8位まで落としている。日本語の漢字表記は「市俄古」。また、シカゴに住む人々は「Chicagoans（シカゴアンズ）」と呼ばれている。



◎シカゴ日本人学校の概要

イリノイ州私立学校登録校、文部科学大臣認定校

★☆☆ CHICAGO FUTABAKAI JAPANESE SCHOOL - DAY SCHOOL ☆☆☆

- 1 設置団体 J C C C（シカゴ日本商工会議所）
- 2 所在地 2550 N. ARLINGTON HEIGHTS RD, ARLINGTON HEIGHTS, IL 60004
TEL (1-847-590-5700)
URL <http://www.chicagojs.com>E-mail teacher@chicagojs.com

3 学校教育目標

自ら学び,自ら考え,主体的に判断し,行動できる児童・生徒の育成
～国際社会にはばたくシカゴっ子を目指して～

- (1) 進んで学び,探求する学力を身につける子 (知)
- (2) 責任と協調と奉仕の精神を重んじる子 (徳)
- (3) 豊かな心を持ち,たくましく生きる子 (体)
- (4) わかりあう子 (国際理解)

4 在籍園児・児童・生徒数 (4/18/2014 現在)

幼稚部 58名 小学部 126名 中学部 40名 計 224名

5 特色ある教育活動

- (1) 学習指導要領に準拠し,母国語としての日本語の習得に重点を置いている。
- (2) 児童生徒の国際性を豊かにするため,英語教育の充実に努力している。英語学習は,小学1年生から小学6年生までは週4時間,中学生は週5時間。いずれも少人数による習熟度別コースのクラス編成で実施。中学卒業までに英語検定2級取得を目標としている。幼稚部では英語遊びの活動を実施。教師陣はアメリカ人教師5名と政府派遣現職英語科教員等で編成。
- (3) 基礎的な知識・基本を習得し,それらを活用し,新たな問題を解決していく力の育成を重視している。また,現地校との交流を積極的に推進し,国際理解教育の充実に努めている。
- (4) 年間200日間の授業を行っている。

○多彩な教育活動の一例

学級園を利用した草花や野菜の栽培体験,買い物体験,
警察署訪問,消防署訪問,美術館訪問,工場見学,
モール見学,図書館訪問,音楽鑑賞教室,メトラ乗車体験
現地コーチによる水泳やスケート教室,ハロウィン集会,百人一首大会,七夕集会,
クリスマス集会,節分集会 等

○現地校との交流学習(2013年度の交流校)

Greenbrier Elementary School, Tripp Elementary School, Ivy Hill Elementary School,
Windsor School, Dirksen Elementary School, Thomas Middle School

6 個に応じたきめ細かな進路指導

全日校生徒は,日本国内生徒と同様の受験に加え,帰国子女枠でも受験できる。

また,現地への高校進学も考慮し,現地校の生徒や教員との意見交換会の機会を設けている。

シカゴ市には,2,635人(2012年10月現在)の日本人が在留している。シカゴ日本人学校は,シカゴ中心部から,北西におよそ30マイル(約48km)離れたアーリントンハイツ市にあり,そのアーリントンハイツ市を含めたシカゴ市近郊には,日本企業が多く進出しており,およそ12,000人の日本人が在留している。

イリノイ州は,大きく6つのcounty(郡)に分けられ,シカゴ市や

アーリントンハイツ市などは、「cook 郡」に属する。アルカポネの登場以来、常に治安が不安視されているシカゴだが、「cook 郡」の北部、中でも、シカゴ市中心部や他郡に比べ、比較的安全であり、また、富裕層も多く居住している。そのため、イリノイ州が毎年独自に実施している「Illinois Standards Achievement Test」と呼ばれる学習の定着度合いを測る調査では、他郡に比べ、非常に高い達成率を示している。



校舎は、アーリントンハイツ市が所有する建物を借りているが、設置団体である JCCC (シカゴ日本商工会議所) は、この建物をシカゴ日本人学校としてだけでなく、シカゴ補習授業校としても運営しており、世界で唯一日本人学校 (以下「全日校」) と補習授業校 (以下「補習校」) が校舎を共有している。在籍児童生徒数 (小中学生) は、全日校が 160 名に対し、補習校がおよそ 400 名と倍以上に達し、在留している 2/3 の家庭は、子どもの英語習得を主な目的として現地校に通わせ、週に 1 日通う補習校で、日本の教育を維持しているのが現状である。

特色ある教育活動として 2 つ紹介する。1 つは「英語学習」について。シカゴ日本人学校では、日本国内の教育課程に準拠しながら、アメリカの ESL 教育を取り入れた本校独自の英語プログラム「シカゴ方式」を開発・実践している。“Open. Fun. Effective.” = 「みんな分かる。やる気になる。力がつく。」をモットーに、ESL 教育のエキスパート (現地講師) と日本人教員 (政府派遣) が一貫したカリキュラムを作成し、聞く・話す・読む・書くの確かな 4 技能の育成を目指して指導にあたっている。

※ESL 教育 (ESL=English as a Second Language) とは「第二言語としての英語」という意味で、アメリカの現地校で英語を母語としない子どもたちが、少しでも早く授業を英語で受けられるようにと開発された、外国語としての英語習得プログラムのこと



もう1つは、「現地校との交流学習」について。シカゴ日本人学校では、前述した通り、近隣の現地校と交流学習を行っている。現地校を訪問する（GO）と招待する（COME）で、その内容は異なる。小学部1年生、6年生と中学部は、「GO」[COME]共に、1回ずつ。小学部2年生から5年生は、各2回ずつ行っている。「GO」では、主に現地校の学校生活を体験することに重きが置かれる。時期として、ハロウィーンやクリスマスと重なることが多く、アメリカならではの文化にも触れられる貴重な機会にもなっている。「COME」では、現地校の子ども達に対して、日本ならではの習慣や文化を伝える内容が中心となる。「GO」「COME」共に、現地校の子とパートナーを作り、お互いに教え合ったり、協力したりする場面が多く盛り込まれる。



「英語学習」「交流学習」共に、詳しくは、シカゴ日本人学校ホームページを参照。

[\(http://day.chicagojs.net/\)](http://day.chicagojs.net/)

◎ 3年間の派遣生活を通して感じたこと

(1) 学校編

設立は昭和53年9月。2008年4月には、新たに幼稚部が作られ、現在は幼小中併置校となっている。

（文部科学省からの派遣教員は、小中学校のみ）

建物及び敷地は、School District25（日本でいう教育委員会）が管理するものを借りている。建物は、大きく7つに分かれている。そのうち、一番大きな棟を体育館や音楽室、図書室等の特別教室として使用している。その他の棟は pod（ポッド）と呼ばれ、中央の Fpod に職員室、校長室、応接室を構えている。その外側に広がるように建つ5つの pod を、A=中学部、B=小学部4～6年、C=英語科、D=小学部1～3年、E=幼稚部として使用している。



<元気なあいさつを交わす朝>

児童生徒は、毎日バスで登下校している。中学部と小学部6年生は、先に到着した子から、率先して玄関に立ち、下級生を出迎える。元気でにこやかな気持ちの良いあいさつが交わされる。相手意識を持った素晴らしいあいさつが、伝統として引き継がれている。



<様々なケースに応じた避難訓練>

年間を通して、多くの避難訓練が実施される。日本でも行われる火災や地震、不審者対策に加え、建物の中央に、頭を守りながらうずくまるトルネードに備えたものや、外へ避難しても寒さで凍えてしまう厳冬期に備え、近隣の教会に避難するものなど、日本では通常行われていない訓練も多い。年間で見ると、8～10回実施されている。

火災避難訓練



バス避難訓練



トルネード避難訓練



不審者対策避難訓練



厳冬期避難訓練



<給食指導・清掃指導のない毎日>

日本国内では、学級担任を受け持つと、日頃の学習指導や生徒指導の他に、給食指導と清掃指導に、大きなエネルギーを要している。しかし、ここでは、子ども達は、毎日ランチ（弁当）を持参する。また、カストディアンと呼ばれる清掃や修理営繕を担当するスタッフが常駐しているため、子ども達自身が清掃を行うこともない。その分、担任の負担は減るが、「食育の指導」や「勤労・奉仕の心を養う」ことに頭を悩ます。

<最大のイベント「運動会」「文化祭」>

日本国内と同様に、運動会と学習発表会が教育課程に位置づけられている。どちらも、小中合同での実施となる。運動会では、応援合戦の練習を始めとして、中学部の生徒がリーダーシップを発揮する場面としての位置づけが大きく、小学部教員は、学年の種目に専念できる。その分、中学部教員の負担は、非常に大きい。逆に文化祭（現在は、「双葉フェスティバル」に名称変更）は、小学部は学級毎、中学部は学部で一つの演目となっており、小学部教員一人ひとりの力量が試される。毎年、話し合われた成果と課題が、次年度にしっかりと引き継がれ、常により良いものを目指し、教員が一丸となって取り組んでいる。

運動会



文化祭



<1年生でも毎日6時間授業>

登下校バスの運行の都合上、小学1年生も、年間を通じて毎日6時間授業となっている。午後からは、「読み聞かせ」や「英語遊び」など、子ども達が楽しく活動できるよう工夫されているが、中には、片道1時間以上かけて通学している子も多く、慣れるまで体力的にタフさが求められる。

<充実した修学旅行>

小学部6年生はワシントンD.C.、中学部3年生はボストンが旅行先となっている。アメリカの歴史を学ぶ上では、どちらも得るものは大変大きい。

子ども達は、それぞれに報告会を行うことで、その収穫の大きさを改めて感じていた。ワシントンD.C.のスミソニアン博物館は、その多くが入館料がかからず、また、一つひとつの建物も非常に大きく見所も満載。アメリカのスケールの大きさを実感した。



(2) 生活編

基本的には、日本国内とほぼ同様に働くことができる学校業務とは異なり、日常生活では、日本との生活習慣の違いから、最初のうちは精神的な不安は尽きない。しかし、派遣者同士が家族ぐるみで互いに支え合い、また、いつでも現地採用の英語科教員や事務スタッフが親身になって助けてくれるため、何の不自由さも感じることなく、安心して暮らすことができた。

<いざとなれば日本人>

赴任中の一番の心配事は、やはり「医療」。しかし、日本人が多く住むシカゴでは、日本人医師が常駐しており、日本人専門に診察してくれる病院もある。体調を崩した時はもちろん、日本国内と同様の定期検診を受けることもできる。また、日本食も容易に手に入れることができる。日本食を専門にしている大型スーパーの品揃えは、日本国内と全く遜色がない。店内には、書店やフードコートも…。和食レストランも多く存在する。こちらも、店構えからメニュー、店員の接客に至るまで、全てが日本そのもの。

料金は、やや割高に設定されている。そのため、生活に慣れてくると、経済的な面を考慮し、現地の病院や食料品店を利用することが多くなる。しかし、いざとなれば日本と同様のサービスが受けられるという安心感があるのは、精神的な面で非常に大きい。



<異なる生活習慣>

円とドルの通貨単位の違いだけでなく、アメリカでは、日本が使用している国際単位をほぼ目にすることはない。例えば、気温は摂氏(℃)ではなく華氏(°F)、車の時速メーター表示はkmではなくmile、ガソリンスタンドはリットル(L)ではなくガロン(g)、食料品店での精肉などの量り売りはグラム、キログラムではなくオンス、ポンドなどなど。

また、日本以上に車社会のアメリカでは、現実として、車を利用しなければ生活が成り立たない。右ハンドル、右車線走行以外にも、いくつか日本と異なる交通ルールも存在する。慣れるまでは、苦労することも多々あるが、それほど大きな問題ではない。

<伸びない英語力>

日本人が多く、困った時には、たくさんの方に助けもらった。そうした出会いにはもちろん大変感謝しているが、周りに甘え過ぎてしまうと、ちょっとした後悔も…。英語力が伸びなかったことがその一つ。日本人学校では、日本語以外でコミュニケーションを図る場面がほとんどない。現地採用のスタッフと接することもあるが、必要最低限の決まり文句を覚えてしまうと、ある程度会話が成立してしまう。また、英語でうまく表現できない時には、日本語が理解できるスタッフに助けってもらってしまう。買い物や旅行などで、英語を話すことが求められる場面も、一度経験してしまえば、多くの場合、決まったフレーズで対応ができてしまう。英語を学ぶべき最高の環境にありながら、自分自身がそれを活かすきれなかった。安心して生活できる反面、自らを追い込まなければ、アメリカに住んだからといって、容易には英語力は向上しないことを痛感した。

<アメリカと言えば...>

4大メジャースポーツを、間近で、しかも手頃な値段で楽しむことができる。日本人にとって、生活しやすい環境が整っていることから、野球では、シカゴにあるチームに、常に日本人選手が在籍しており、親しみ深い。また、競技によって、試合が行われる時期がずれており、一年間を通して、常に何かのスポーツを目の前で観戦することができる。

スケールの大きなアメリカでは、国立公園の規模も、日本とは桁違い。その大自然の圧倒的な存在感を目の当たりにするたびに、不思議なパワーをもらったような気がする。



アンテロプキャニオン



アーチーズ



グランドキャニオン

<見習いたい after you の精神>

アメリカのショッピングモールには、ほとんど自動ドアがない。一度に数人が入口のドアに近づいた時、最初に扉に手をかけるのは男性である。そして、人の波が去るまで、開けた扉を押さえて、他の人をナビゲートする。「after you (お先にどうぞ)」と。一見、怖そうな男性も例外なく行うその姿に、驚き感心した。自由なイメージが強いアメリカだが、こうした子どもやお年寄り、女性などに対する男性の振る舞いは、礼儀正しいとされる日本人も、大いに見習うべき姿だと強く感じた。



<驚くべき冬>

シカゴの冬では、大変驚かされることが多々あった。まずは、その寒さ。時には、 -30°C を下回る。そうした場合は、臨時休校となる。次に、雪対策。北海道とほぼ変わらない緯度のわりには、降雪量はそれほど多くない。しかし、寒さが厳しいため、1月、2月に降る雪は、そうは簡単に解けることはない。にもかかわらず、シカゴでは、自動車のタイヤを交換することはない。路上に降り積もった雪は、すかさず除雪車が雪を避け、そして、大量の塩をまき、路面の凍結を防いでいるからだ。とは言っても、初めての冬は、ノーマルタイヤで走行することに抵抗があった。シカゴには大きな山がない。1時間半ほど、北に車を走らせ、ミルウォーキー州に入ると、それなりの規模のスキー場が現れる。しかし、そのほとんどが人工雪。北海道に降る雪は、スキーに適していると聞いていたが、その通りだと実感した。



◎おわりに

派遣期間の3年間は、学校の雰囲気も落ち着いており、私自身様々な試みにチャレンジできた、大変意義深い毎日だった。派遣前には、学校・生活両面で、多くの不安を抱いていたが、いざ渡米してみると、大きなトラブルやハプニングにあうことも、ほとんどなかった。それも全ては、支えてくださった周りの方々のおかげだと感謝している。アメリカの教育事情を直接目にするすることで、多くの学ぶべきことも発見できたが、同時に「日本の良さ」を改めて実感できた3年間でもあった。この貴重な3年間の経験を、これからの教育現場で大いに活かしていきたい。

